

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月28日現在

機関番号：34509

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820081

研究課題名(和文) 「存在の呪縛」からの思惟の解放と「無の論理」の構築

研究課題名(英文) Release of thinking from the spell of Being and construction of the logic of nothingness

研究代表者

松井 吉康 (MATSUI YOSHIYASU)

神戸学院大学・人文学部・講師

研究者番号：10582869

研究成果の概要(和文): 思考の究極の問いは「まったく何もないのか、そうではないのか」であるが、そこで問われているのは「端的な無」という可能性の真偽である。こうした可能性としての「無」と「無ではない」を問うことで、「無ではない」という現実(もしくは真理)に先立つ次元を問題にすることができるのである。こうした「無の論理」は「現実以前」を扱うことができるのである。その結果「無ではない」という真理が、「無から成立する何らかの働きもしくは出来事」ではないことが明らかとなる。

研究成果の概要(英文): The ultimate question of thinking is whether there is entirely nothing or not, i.e. whether this nothingness as possibility is really true or false. By considering nothingness and non-nothingness as possibilities we can discuss the level that precedes the reality or the truth that it is not entirely nothing. This logic of nothingness can apprehend the level before reality. Hence it becomes clear that the truth of non-nothingness is neither an act nor an event that is realized from nothingness.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学原論・各論、存在論、存在の呪縛、無、「無ではない」、無の論理、パルメニデス、フレーゲ、ウィトゲンシュタイン

## 1. 研究開始当初の背景

ハイデgger以降、哲学は再び存在への関心を取り戻したかに見えるが、現代ドイツに

おいて「存在とは何か」という問いを真正面から論じている独創的な哲学者はいない。むしろ英米圏の分析哲学の流れの中から様々な存在理解の試みがなされている。しかし八

イデッガーにせよ分析哲学にせよ、存在と無の関係を、常に存在の側から見ているという点では変わらない。彼らにとって「無」とは「存在の不在」なのである。だが、こうした傾向は、そもそもの哲学の始まり、つまりパルメニデスにおいてすでに見られるのである。哲学の歴史は、常に「存在を前提として」議論を展開してきたのである。そうした傾向に対し、私は「無」を「まったく何も無いこと」と捉え、そこから問題を見ていくことを提唱している。まったくの無は、存在を前提としない。それは存在の不在ではないのである。無をそのように規定するならば、今度はそこから存在が「無ではない」こととして姿を現す。こうした考えを主張したドイツ語の拙論は、ドイツの有名な哲学雑誌に掲載され、一定の支持者を得ているのだが、そうした視点から、古代哲学、中世哲学、さらには現代の分析哲学などの成果を盛り込みながら、端的な無と「無ではない」の対比構造を明らかにしたい。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、私のこれまでの研究が明らかにしてきた「ヨーロッパ思想のうちに潜む存在の呪縛」を、その歴史の中で再確認すると同時に、そうした呪縛から解放された立場から、これまでにない視点で存在を眺めることである。存在は「まったく何も無いこと」を含意しているはずであるが、本研究は、そこで言われる「まったくの無」(=まったく何も無いこと)とその否定である「無ではない」の関係を考察する。しかしそのためには、これまでの哲学が考え、啓太「無」の理解との対決が欠かせない。そこでこうした哲学史を貫く従来の「無の理解」を顧みつつ、それと「まったくの無」がどのように異なるのかを明らかにしたい。

## 2. 研究の方法

「無の否定」ということを正確に理解するために、フレーゲの「否定」を巡る考察をベースにして、「無」と「無ではない」の関係を考察する。そしてそれをウィトゲンシュタインの言語論と対比させながら、そうした論理が展開可能であるのかどうかを考察する。つまり経験以前の「純粋に論理的な可能性」として問題を考察していくことになるのである。こうした考察は、「言語と論理」という問題と直結するが、それは現代の論理的意味論と交わることになるはずなのである。こうした考察と平行してパルメニデスの「存在と無」の対比を検討し、そこに潜む「端的な無へのまなざし」を取り出す。最終的には、それがどのようにして再び闇に埋もれるこ

とになったのかを明らかにする。

## 3. 研究成果

本研究の出発点は、「まったく何も無いのか、それともそうではないのか」という問いであるが、この問いは、かなり奇妙な問いであり、実際、少なからぬ研究者から問題視されている。というのもこの問いの存在自身が、「無ではない」ことを明らかにしているのだから、問いそのものに意味がないように見えるからである。しかしそれは見かけ上のことに過ぎない。私たちは、この問いを問うことで、「現実の存在以前」を問うことができるのである。「無か」という問いは、それ自身が矛盾を含まないので、論理的には可能である。しかし問いとは、ある意味で答えに先行するものである。つまり「無か」という問いは、「無ではない」という現実(もしくは真理)に先行するのである。こうした問いは、現実を判定することで出る答えを超越している。問いは、真理あるいは答えに先行する。それは現実が成立する以前を問うているのである。そうした「現実の超越」、「可能性への立ち戻り」の究極が「無か」という問いなのである。この問いに論理的に先行する問いは、原理的に存在しない。従って原初の問いが問っている二つの可能性、つまり「まったく何も無い」と「無ではない」に先行する可能性もありえない。「無」と「無ではない」は、互いに還元不可能な究極の可能性なのである。

一見すると「無ではない」という可能性は、「何も無い」という可能性を前提にして、それを否定して形作られた可能性のようにも見えるが、そうではない。フレーゲが否定について語っているように、「否定」は、何かを付け加えるのではないからである。Xの肯定と否定は、Xそのものに何も付加しない。少なくとも意味の上で、何かを付加することはないのである。

こうした「無」と「無ではない」は、相互に還元不可能な究極の可能性であるにもかかわらず、実は哲学の歴史において一度も問われたことがない。それというのも「まったく何も無い」という端的な無は、思考不可能だと思われてきたからである。「無は思考できない」というのは、現代に至るまでかなり強固に信じ込まれているドグマであるが、なぜ人々がそう考えているのかというと、彼らが「無」を「存在しないもの」と捉えてきたからである。「存在しないもの」については、その真偽が確定できない。したがって「存在しないもの」については何も語れないし思惟することもできない、というわけである。では、もしも無が「存在しないもの」とは別のことを意味するとしたらどうか。「まった

く何もないこと」という端的な無は、「存在しないもの」という無ではない。つまりそれは、哲学の歴史が「思考不可能」と断定した無つまり「存在しないもの」のことでなく、「まったく何もないこと」という、哲学の考察範囲すらも逸脱するほどに極端な可能性なのである。

「まったく何もない」という可能性の真偽が、「無か」という問いにおいては問われている。しかしこうした可能性は、ウィトゲンシュタインが「論理空間」ということで考えた論理的諸可能性には含まれない。なぜなら後者は、現実との関係の中でありうる一切の可能性を問題にしているのだが、端的な無という可能性は、そうした現実との接点を持たないからである。現実と接触するような無は、端的な無ではない。現実ということ自体が、すでに「無ではないこと」を前提としており、そういう意味では「現実の無」などというものは、いかなる意味でも端的な無ではあり得ないのである。

端的な無は思考可能である。こうした主張に対しても、しばしば「そうした無は、思考されているのだから、やはり一つの存在者である」という異論が投げかけられる。しかしそうした異論は、「思考されるならば、それは存在するはずだ」という先入見に基づいている。「何もない」という表現で、私達はいかなる対象もイメージしない。そうしたイメージがまったくないということ、その語は語っているのである。それはいかなる対象も指示しないにも関わらず、それについて思考可能なのである。たとえば「端的な無からは、何も成立しない」というテーゼを私たちは、端的な無そのものの理解から帰結することができる。端的な無から何かが生まれると言うのであれば、それはもはや端的な無ではあり得ない。端的な無が思考不可能であれば、こうしたテーゼを確定することもできないはずである。しかし私たちは、このテーゼを支持しうる。つまり端的な無は思考可能なのである。

端的な無が思考可能であるからこそ、「無か」という問いは、意味を持ちうる。私たちは、思考可能な無、論理的には可能な無について、その真偽を「無か」という問いにおいて問っているのである。いうまでもなくこの問いに対する答えは「無ではない」以外ではあり得ない。端的な無は、思考不可能なのではなく、偽なのである。哲学の歴史は、こうした無について「無ではない」とすぐさま反応し、その可能性そのものに立ち止まることを一度たりともしなかつたのである。「無は偽である」「とにかく何かが存在する」。そうした断定が、私たちを「端的な無」から遠ざけることになったのである。

端的な無は、定義上、いかなる存在とも無

縁でなければならない。したがって「端的な無」から「無ではない」への移行もあるいはその逆も不可能である。しかし「無」から「無ではない」への移行が不可能だとすると、「無ではないこと」そのものは、いかなる意味でも「働き」や「出来事」ではあり得ないことになる。他方、哲学の歴史においては、しばしば存在はある種の出来事もしくは働きであるとされてきた。近年では、ハイデッガーが存在を「性起 (Ereignis = 出来事)」と呼んだが、そうした存在の理解は、その究極の含意である「無ではない」には当てはまらない。つまりそうした理解は、究極の存在の意味を捉え損なっているのである。それというのもハイデッガーが探求しようとしたのは、現実の存在であって、本研究が問うような「現実以前の論理的可能性」ではないからである。彼の立場からすれば本研究の研究对象である無は、単なる抽象的な無、無の形式的な理解にすぎないことになるだろう。しかしそう主張することで、彼は、現実にも縛られてしまい、存在の究極の含意であるはずの「まったくの無ではない」に行き着くことができなくなったのである。

こうしたことからさらに明らかとなるのは、現代の分析哲学が「可能世界論」を用いて展開する存在論が、私達が問題とする「無の可能性」に考え及んでいないということである。なぜなら可能世界論で語られる「何も存在しない世界」というのは、「存在可能な世界」の一つであり、それ自体「端的な無」を意味し得ないからである。可能世界論を用いて展開される存在論もまた、存在の呪縛から解放放たれてはいないのである。

本研究の成果の一部は、2011年に龍谷大学で開催されたハイデッガーフォーラムにおいて口頭発表され、さらにその原稿に手を入れたものが、同フォーラム編集の電子ジャーナル『Heidegger-Forum Vol.6』に掲載される予定である。また、こうした成果に目をとめた、今年の夏に開催される「ドイツ語圏日本学研究者学術会議第15回大会 (15. Deutschsprachiger Japanologentag)」の主催者であるチューリッヒ大学日本学教授から、その開幕記念講演を依頼されている。そこでは、「Zum Philosophieren in der japanischen Sprache」というタイトルで、「日本語という言語が哲学にどう貢献するか」という問題を扱う予定である。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松井吉康、「思索の事柄」と「無」、ハイデッガーフォーラム編、電子ジャーナル

『Heidegger-Forum』、査読なし、Vol.6、2012、  
In press.

〔学会発表〕(計1件)

松井吉康、「思索の事柄」と「無」、ハイデガ  
ーフォーラム、於龍谷大学、2011年9月17  
日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松井 吉康 (Matsui Yoshiyasu)

神戸学院大学・人文学部・講師

研究者番号：10582869